

天保十四年の キャリアオーバー

五十嵐貴久

第四回

六

霜月晦日しもつきみぞか（十一月三十日）辰の下刻たつげこく（午前九時）。目を覚ますと、談志だんしとお葉ようが覗き込んでいた。二人とも満面の笑みである。

「何を笑ってやがる」

煎餅布団せんべいに寝そべったまま目だけを向けると、時間だよとお葉が言い、用意はできてるぜ、と談志が手にしていた剃刀かみそりを掲げた。

起きたばかりじゃねえか、と團十郎は上半身を起こした。

「面つらぐらい洗わせろ。腹だつて減ってる。お茶の一杯も出ねえのか？」

それほど余裕はありません、と土間の框かまちに座っていた鶴松つるまつが声をかけた。

「法良ほつりようが寺を出るのは、牛の正刻せいこく（昼十二時）です。朝寝を楽しんでいる場合じゃありません。だから、昨晚のうちに済ませておいた方がいとあれほど言ったのに……」

嫌なこった、と團十郎は枕元にあつた貧乏徳利せきりの口を振って、手のひらをべろりとなめた。数滴落ちただけだったが、安酒の味が舌に残った。

「別に朝寝がしてえわけじゃねえ。ちつと深酒が過ぎただけだ。それというのも……おい、本当にやるのか」

未練がましく自分の頭に手をやった。伸び放題そうはつの総髪そうはつだが、案外気に入っている。

法良という僧侶と入れ替わるために、坊主頭にしなければならないと鶴松が言ったのは七日前のことだ。鳥居とりいが持っている百万両を奪うためにはそれしかないとわかっている、剃髪ていはつするのは嫌だった。

ぐずぐず文句を言つては引き伸ばし、毎晩酒を飲んでほぐらかしていたが、さすがに逃げられないようだ。

畜生ちくせい、とつぶやいた團十郎の手を左右からお葉と談志が引つ張り、土間に降ろした。

古い筵むしろが敷いてある。その真ん中で團十郎は胡座あぐらをかいた。

「やりたきややれよ。ただ、言っておくが、こう見えておれは体が

弱い。生まれつき病弱で、蒲柳ほりゅうの質しつなんだ。明日から師走しわすだぞ？ この寒いのに髪を剃り上げられた日にや、すぐ風邪をひいちまう。一度寝込んだら、おれは長えながからな。大晦日まで、寝たきりってことになるかもしれねえ。そうだったら、おめえの立てた策も台なしどころか——」

熱い、と團十郎は飛び上がった。お葉が頭から湯をかけたのである。

「細かいこと言ってんじやないよ。決めたことだろ？ 神妙しんみょうにして座ってな。すぐに終わるから」

着物の懐から取り出したのは、鏝さびの浮いた鉄はさまである。何も言わず、團十郎の長い後ろ髪を掴んで、迷わず切り落とした。ぱさり、という音と共に、筵むしろに髪かみの毛けの束つかが落ちた。

本当にやりやがった、と團十郎は髪かみの毛けをつまみ上げたが、そのまま放り捨てた。

「容赦ようじやうねえことをしやがる。まあいいさ、一回切っちゃまったもんはしょうがねえ。どんどんやってくれ」

言われなくても、とお葉が器用に手を動かし、頭を刈っていった。髪結かむすいでもしていたのか、妙に慣れていた。

小半刻こはんとき（三十分）ほどで、五分刈りの頭になった。これじゃ駄目なのかと言った團十郎の前に、研ぎ上げた剃刀かみばしを握った談志が回っ

た。

「五分刈りの坊主なんて、いるわけねえだろう。任せとけ、七代目。こう見えて、おいらは月代を剃るさかやきのがうめえんだ。貧乏旗本とはいえ、親父は侍だったからな。子供の頃ガキからやってるから、慣れたもんだ。まあ、かれこれ二十年ぐれえご無沙汰だが、昔取った杵柄きねづかって言うじゃねえか」

気をつけてくれ、と團十郎は真顔で言った。

「おれは役者だぞ。頭はともかく、顔に傷がついたらおまんまの食いっぱぐれだ」

役者は辞めたんじやなかったのかい、とお葉が半畳はんじょうを入れる。動くなよ、と談志が頭に剃刀を当てた。

横からお葉がちよろちよろと湯を注いでいる。頭を剃る何とも言えない音が脳天に響き、團十郎は顔をしかめた。

江戸時代初期から中期にかけて、武士、町人、いずれも鬘まげを結い、月代を剃るのが一般的な髪形だったが、歌舞伎役者に関しては多少事情が違った。

演じる役柄によって、髪形を変える必要があるため、多くの場合短く刈っている。手鎖ていやくになるまでは、團十郎も七分刈りにしていた。

その方が鬘の付け外しに便利なためだが、歌舞伎役者は医者や僧侶と同じく法外の者とされたため、どのような髪形にしても許され

たのである。

江戸十里四方所^{えどじゆうりしほうとせうばら}払いの処分を受けてから、團十郎は髪を伸ばし放題にしていた。田舎の舞台上上がるのに、いちいち髪を切りたくないという見栄である。

そのため総髪となっていたが、半年以上切っていなかったため、髪が強くなっているようだ。なかなか難しいな、と剃刀を当てている談志から、土間の鶴松に目だけを向けた。

法良の替わりに、鳥居が開く陰富^{かげとみ}の会合に出ることを命じたのは鶴松である。鳥居の手の内を調べるのはそれしかないと言得され、納得はしていた。

一種の変装で、僧侶である法良に化けるためには仕方ない。僧形^{そうぎよう}の者に髪があつたら、おかしいと誰でも思うだろう。

会合が開かれるのは今日である。剃髪はいいが、と團十郎は口を開いた。

「こんなことで、本当に法良と入れ替わることができるのかよ」

「衣装は用意してあります」

鶴松が薄い木箱を開くと、そこに僧衣^{そうい}が入っていた。どうやって手に入れたかは聞かなかった。質流れ品でも買ったのだろう。

「七代目の顔が法良と瓜^{うり}二つなのは、わかっているはずです。僧衣を着て、それらしくふるまっていれば、誰も疑いませんよ。歌舞伎

役者として、僧侶を演じたことは何度もあるはずですよ

まあな、とうなずいた時、いけねえ、と談志がつぶやいた。後ろ頭に剃刀の刃が引つ掛かり、傷がついたようだった。

「だから動くなつて言つたじゃないか。七代目、大丈夫だよ。ちつと血が出ただけだから、唾でもつけときやすぐ治ちまうさ」

「汚ねえな、止めてくれ」

勝手なことばかり言いやがる、と團十郎は腕を組んだ。

「おい、鶴松。髪を剃り上げて僧衣を着れば、面もそっくりなんだから、誰も疑わねえつてのはそうかもしれねえ。おれだつて役者だ。坊主の所作しよさぐらい真似られる。だがな、どうやっておれと法良を入れ替えるつもりだ？」

「今日のことですか」

当たり前よ、と團十郎は解いた腕を膝ひざに置いた。

「大晦日の湯島千両陰富の当日は、野郎をふん縛しばつてどこかに閉じ込めときゃあいだろう。後でどんな騒ぎになつたつて、知つたことちやねえからな。だが、今日からひと月つてわけにはいかねえだろう。鳥居に怪しまれたら、すべてが終わちちまうぞ」

そこは任せてください、と鶴松が笑みを浮かべた。どうもその顔に弱い、と團十郎は目をつぶつた。

謀はかりごとは密なるをもつて良しとす、ということなのか、余計なこと

を言わないのは性格なのだろう。少しの間だが、一緒にいて團十郎もそれはわかっていた。

どうかね、と談志が一步退いた。立ち上がって四方から確かめていた鶴松が、いい塩梅あんばいですとうなずいた。

團十郎は目を開けて、自分の頭に触れた。きれいに髪が剃り上げられている。

人の頭っていうのは、意外にでこぼこしてるもんだな、とつぶやきが漏れた。

七

巳みの下刻（午前十一時）、僧衣に着替えた團十郎は鶴松と並んで蝸牛長屋かたつむりを出た。向かったのは寛永寺開山堂かんえいじかいざんどうである。

團十郎は頬ほおかむりをして、顔を隠していた。坊主がそんなことをしているのも妙だが、他にどうしようもない。

幸い、蝸牛長屋を出てから、すれ違う者はいなかった。急ぎ足で歩くうちに、開山堂の前に出た。

「しばらく待ってれば、法良が出てきます」会合の場所は南町奉ぶ行所ぎょうしょ、と鶴松が言った。「法良が通る道はわかっています。入谷いりやへしたやひのこうじ抜け、下谷広小路したやひろこうじを通り、八丁堀はつちようぼりに出ればすぐ奉行所です。それ

が一番近いですし、別の道を使う理由はありません。後は網にかかってくるのを待つだけです」

ひとつわからねえことがある、と團十郎は首を傾げた。

「あの法良って坊主はおれと同じか、もうちつと下だろう。三十をいくつか越えたぐらいか？」

三十二と聞いています、と鶴松がうなずいた。そんな若造がどうして鳥居の陰富に加わってやがるんだ、と團十郎は逆側に首を曲げた。

「坊主のことはよく知らねえが、偉い奴は年寄りばかりじゃねえのか？ そりゃそうだろう。三十そこそこの坊主に、説教なんかされたくねえからな」

「わたしもです」

鳥居の陰富で張る金子きんすは一両、二両じゃねえはずだ、と團十郎は言った。

「千両、二千両でも済まねえ。そうだろ？ 一万両、二万両ってこともあるんじゃないか。そんな大金を持つてるようには見えねえぞ」

名代みよくだいなんです、と鶴松が微笑んだ。

「名代？」

寛永寺の開基かいき（創立者）は三代将軍徳川家光、開山かいさん（初代住職）

は南光坊天海なんこうぼうてんかいです、と鶴松が言った。家光はもちろんだが、天海についても名前ぐらひは團十郎も知っていた。徳川家康の側近として暗躍した怪僧である。

「徳川家にとつては縁も深く、今では増上寺ぞうじやうじと共に徳川家菩提寺ぼだいじとなつているほどです」

それほどの名寺なんです、と鶴松が空を見上げた。晴天の空に鯛いわし雲くもが浮かんでいた。

「そもそも寛永寺の貫主かんじゆ（任職）は、三世以降皇子もしくは天皇の猶子ゆうしが務めています。公家くげですよ。身分が高過ぎて、直接陰富に加わることなどできません」

「だから名代を立てたつてわけか」

公家は博奕ぼくち好きですからね、と鶴松がうなずいた。

「寛永寺でも富籤興行とみくじこうぎやうは開かれていますし、貫主自ら陰富に加わりたいところでしょうが、さすがにそうもいきません。幕府が知つたら、大変なことになりますよ。法良はまだ位も低いですし、万一露る見けんした時は切り捨てればいいだけのことです」

嫌な野郎やろうばかりだな、と暗い顔でつぶやいた團十郎の目の前で、開山堂の門が開いた。出てきたのは三人の男である。

前の二人は二十歳そこそこと言つたところか。いかにも小坊主こぼうずという面相である。無位の僧なのだろう。

その二人が先に立ち、後ろを法良が歩いていった。

少し早いですね、と鶴松が下唇を噛んだ。子供のようなところがある、と團十郎はおかしくなった。

「急ぎましょう。先回りするんです」

駆け出した鶴松の後を追って、團十郎も走った。頬かむりしたまま、法衣の裾をからげているので、黒いずだ袋が走っているように見えるだろうが、構ってはいられない。

鶴松は足が速い。追いつくのがやっとだ。

寒い日だったが、自分の背中から湯気が立っているのがわかった。

八

それほど長く走ったわけではない。しのはずのいけ 不忍池を横目にうえのしんくろもん 上野新黒門町ちやう通りに入ると、武家屋敷が立ち並んでいる一角に出た。

石川主殿頭家の門前で立ち止まった鶴松が、あそこですと指さした。このものかみ

左斜め前におがさわらしなのかみ小笠原信濃守家の屋敷がある。そこに老人と娘が立っていた。立川談志とお葉である。

何をしてやがるとなぐ囁いた團十郎に、芝居が始まりますと鶴松がおかしそうに笑った。

「見ていればわかりますよ。七代目ほどではないにしても、あの二人にもそれなりの心得があります。談志師匠は咄家はなしかですし、お葉さんは戯作者げさくしやですからね。筋を書いたのもお葉さんですから、何とでもなりますよ」

それに、と周囲に目をやった。十人ほどの町人が歩いている。あの者たちはわたしたちの仲間です、と鶴松が囁いた。

「皆、水野様のご改革で職を失った者ばかり。それこそ咄家もいれば、遊女もいますし、水茶屋の娘もね」

細工は流々、仕掛けは上々、あとは仕上げをろうご覧じろってわけか、と團十郎は大きな鼻の下をこすった。

「狙いはわかったが、そううまくいくかね。おれに言わせりや、奴らは素人しろとで——」

静かに、と鶴松が團十郎の体を武家屋敷の軒下のきしたに押し込んだ。隠れていると、法良と二人の小坊主が近づいてくるのが見えた。

「誰か、誰か助けてください！」

目を向けると、談志が両手を振り上げて叫んでいた。その足元にお葉が倒れている。

「お嬢様がお嬢様が」持病の癩しやくでお倒れに、とまた談志が叫んだ。「どなたかお助けください！ 手を貸してください！」

どうしたどうした、と立ち止まった町人たちが遠巻きに様子を見

ている。

どうしました、という法良の声が聞こえた。姿形がそっくりなためか、声まで團十郎とよく似ている。

「ああ、お坊様、助けてください」

談志が法良の法衣の腰にしがみついた。

「あたくしは上野で石田散薬を扱っている門屋かじやという薬問屋くすりどんやの番頭でございます。お嬢様の付き添いで寛永寺へお参りにいく途中、持病の癩でお倒れになって——」

わたしは寛永寺の僧です、と驚いたように法良が言った。ありがたやありがたや、と談志が拝むようにした。

「これも神仏のお引き合わせでございます。お願いでございます。お助けください！」

「どうしろと？ わたしに何ができるといいますか？」

少しの間で結構でございます、と談志が法良の手を取った。死んでも離さないという決死の形相である。

「お嬢様のそばにいてくださいませぬか。寛永寺のお坊様でしたら、お嬢様もどれほど心強いでしょう」

「あなたは？」

「あたくしは店に戻り、薬を取って参ります。何、ほんの二丁ほど先ですから、年寄りでも走ればすぐです。どうか、どうかお願いで

「ございます。一生の頼みでございます」

その場で土下座をした談志を見て、ひでえ大根役者だ、と團十郎は頭を抱えた。何もかもが大袈裟過ぎる。おおげさ

「いくら坊主が世間知らずでも、あれで騙だまされると思うか？」

無言で鶴松が指さした。お葉が法良の手を握り、自分の腹部に当たっている。

何やら色っぽい声で、少し楽になりましたと切れ切れにつぶやいた。しっかりしなさい、と法良が肩を抱いている。

うめえもんだ、と團十郎はゆるゆると首を振った。

「女を知らねえ坊主なんざ、手玉に取れるってわけか。いつもとまるで様子が違うが、女は怖いな」

そのままお待ちを、と駆け出した談志の草履ぞうりの鼻緒が切れ、地面に勢いよく倒れ込んだ。悲鳴が漏れた。

「あ、足が……足が折れました」

下手な芝居をしやがって、と團十郎は苦笑を浮かべた。足が折れました、とわざわざ説明する者などいるはずがない。まるで落語の、下げのようである。

「お後がよろしいようで、とか言い出すんじゃないか」

素人臭い芝居だったが、気づくと人だかりができていた。爺じいさん大丈夫かいと声をかける者、娘さんが心配ね、と囁き交わす女たち。

あいつらは全部サクラかと尋ねた團十郎に、ほとんどがそうです、と鶴松がうなずいた。

「師匠とお葉さんより、周りの声の方が大事なのです。法良は僧です。立場があります。病人を放っておくことはできません。誰もいなければともかく、あれだけ人が集まっているのです。捨て置くことなど、できるはずがありません」

そちらのお二方、と談志が小坊主に震える手を伸ばした。

「申し訳ございませんぬ。門屋まで行って、薬を取ってきていただけませぬか。事情を話せば、店の者がすぐ薬を渡すでしょう。それとも、医者を呼んでもらった方がいいのか……お願い申し上げます。どうかお助けください」

俺が医者を呼んできてやろう、とサクラの一人が言った。

「番頭さん、足が折れてるんだろ？ おい、みんな手伝ってくれ。知ってる医者が近所にいる。番頭さんを運んでやろうじゃねえか」

あんたも来てくれ、とサクラが小坊主の一人の肩を叩いた。お葉の腹を手で押さえたまま、行ってあげなさいと法良が命じた。

そのまま右に顔を向けて、卯之助うのすけと呼んだ。小坊主の名前のようだった。

「門屋という薬問屋に行って、薬をもらってくるように。それほど手間ではありません。仏様に仕える身として、当然のことです」

しばらく、と叫んだ談志が懐から分厚い財布を取り出した。

「しばらくお待ちください。ここに銭と薬の名前がごさいます。いちいち事情を話すより、これを渡した方が事は早いでしょう」

誰が考えた筋立てだ、と團十郎は吐き捨てた。

「何で番頭が娘の薬の名前を書いた紙を大事に財布に入れてるんだ？ おかしいと思わねえのか」

仕方ありません、と鶴松が肩をすくめた。

「談志師匠は薬問屋の番頭ではありませんし、門屋という薬問屋に娘はいません。お宅のお嬢様が癩でお倒れになりました、とあの小坊主が言おうものなら、すべてが水の泡です。無理でも押し通すしかありません。何、道理なんかすぐ引つ込みますよ」

あたいが連れてってあげる、と娘が前に出てきた。娘というよりまだ子供である。十歳ほどだろうか。

「門屋さんなら、あたいが知ってる。うちのすぐ近くだもん。ほら、早く早く。あんなに苦しがるじゃないか。かわいそうでしょ」

お葉が苦痛の声を上げている。どこかなまめかしく、色っぽいのはわざとそうしているのだろう。

法良の手を握ったまま、放そうとしない。法良も満更まんざらではなさそうである。

仕方ないねえ、と丸鬚まるまげの女が人だかりをかき分けるようにして、

お葉と法良に近づいた。

「こんな道端で騒いでいたら、その辺のお屋敷から文句が出るよ。袖擦り合うも多生たしよの縁そですっていうだろ。うちで面倒みてあげる。ほら、みんな手伝って。娘さんを運ぶんだよ。こんなに寒いんだ、癩癩どころか風邪までひいちゃったらどうすんのさ」

そうだ、そうしよう、とその場にいた全員が声を揃えた。最初から筋書きが決まっているのだから、話は早い。

医者へ談志を運ぶ者たちと小坊主、薬を買いに行く子供と小坊主、お葉を家へ連れていく者たち、ときれいに三つに分かれた。お葉は法良の手を放さないままである。

そろそろ出番です、と鶴松が團十郎の肩に手を置いた。

「あの子供は道に迷うことになっています。門屋というのは小さな薬問屋で、看板ありません。医者も一軒目は留守で、二軒目に回らなければなりません。途中で談志師匠が痛い痛いとお騒ぎしますから、そう簡単には戻ってこられないでしょう。その間に、お葉さんについてほしいとわたしが法良を説きます」

無理だろう、と團十郎は首を振った。

「法良は寛永寺の住職の名代だと言ったよな。陰富について、詳しく聞いてこなければならねえ。通りすがりの病人のことなんぞ、知ったこっちゃねえというのが本音じゃねえか？」

拙者、高家旗本上杉義正家臣、畠山源三郎、と居住まいを正した鶴松が名乗りを上げた。

「高家上杉家って……上条上杉家のことか」

左様、と鶴松がうなずいた。上条上杉家は室町期に興った名家上杉家の支族として有名である。

江戸時代に入ると上杉姓を名乗り、旗本となっていた。戦国大名の中でも名高い上杉謙信、米沢藩初代藩主上杉景勝とも血縁関係にある。

高家とは儀式や典礼を担当する役職で、旗本なら誰でもなれるものではない。家柄、家格が高くなければならないのである。

実際に高家旗本は京の天皇に拝謁する機会が多かったため、官位は高かった。

*

*

*

江戸時代を通じ、最も名前が知られている高家旗本は吉良上野介であろう。

元禄十四年三月十四日、江戸城殿中松之廊下で赤穂藩主浅野内匠頭が、それまで長く苛めを受けていた吉良に恨みの一太刀を浴びせたことで、赤穂藩は取り潰しになり、浅野家も断絶する。

だが、吉良家に対して、幕府からは何の咎めとがもなかった。これを不服として赤穂藩の浪士ろうしたちが決起し、主君の仇を討つため、吉良邸へ討ち入りすることとなる。

いわゆる忠臣蔵であるが、この事件を元にした人形浄瑠璃や歌舞伎の演目として「仮名手本忠臣蔵」は大人気を呼んだ。権高けんたかな敵役かたきやくとして、吉良上野介は重要な登場人物である。

「仮名手本忠臣蔵」はもともと人形浄瑠璃の演目で、その後歌舞伎に転用された。フィクションの部分も多いが、高家旗本がその官位の高さから、大名さえも下に見ていたことがわかる。

武士の身分、そして上下関係は複雑だが、あえて単純化して言えば、旗本と大名は將軍お目見えかみが適うという意味で、同じ身分となる。

旗本にも大名にも、朝廷から与えられた官位がある。高家旗本は従五位下侍従じゆごいげじじゆうに任じられ、その位階は他の旗本より高い。

大名の多くは従五位下なので、家格は低くなる。旗本の中でも高家旗本は別格、というのがこの時代の常識であった。

* * *

「おめえも侍に化けるってわけか」

満更嘘ではありません、と鶴松が答えた。矢部家も江戸幕府開闢かいびやく以来の旗本である。

今は牢人ろうじんの身だが、歴れつきとした旗本の家の出だ。容儀ようぎを整えれば、武士を名乗っても疑われることはないだろう。養子とはいえ、鶴松にも生まれつきの威厳が備わっていた。

「衣服も刀も用意があります」後は着替えるだけです、と鶴松が言った。「上杉家の江戸家老、多々良たたら喧路けんろが鳥居の陰富に加わっているのは、法良も知っています。多々良の家臣、畠山源三郎を装ったわたしが会合での話を細大漏らさず聞き、それを伝えるからあなたは病人の側にいるように、それが僧侶としての務めでしょうと諭さとせば、法良も納得します」

「なるほど」

「その間、七代目は戻ってきた小坊主を連れて、南町奉行所へ行き、法良のふりをしてすべてを見て、聞いて、わたしに教えてください」
いいですね、と念を押した鶴松が速足で丸鬚の女の家に向かっていった。

「人の世はみな芝居、か」

初代市川團十郎が遺した言葉をつぶやいて、團十郎は通りに出た。しばらく待っていると、東と西から同時に二人の小坊主が駆け込んできた。

「ずいぶん、遅かったですね」

優しく声をかけたのは、法良になりきるための芝居である。四、五日かけて法良の人柄を調べていたので、難しくはなかった。

これを、と小坊主の一人が小さな紙袋を差し出した。

「薬でございます。法良様、あの娘さんはどこに？」

世の中には親切な方が大勢おられます、とその紙袋を受け取り、もう一人の小坊主が連れてきていた医者に渡した。

「すべては宿縁しゆくえん。御仏のお導きです。ありがたやありがたや。医者殿、あそこの家に癩いんを起こした娘さんがおります。この薬をお使いください。されば、癩いんなどあつと言う間に治るであります」

おっしゃる通りですな、と医者が額たいこを手のひらで叩いた。太鼓持ちの仕草である。

止めねえか、馬鹿、とその手を掴んだ。出がわかつちまうぞ、と耳元で囁いて、二人の小坊主に向き直った。

「さて、わたくしたちは南町奉行所へ参りましょう。刻限こくげんに遅れてはなりません」

はい、と声を揃えてうなずいた二人が先に立って歩きだした。こいつが芝居ってもんだ、と團十郎は一人悦に入っていた。

南町奉行所の門前に立つと、待て、と鋭い声が左右からかかった。

南町奉行所とは町奉行が勤める役所としての名称で、一般には御番所、もしくは御役所と呼ばれる。これは北町奉行所も同じであった。

その役割は警察、裁判所を合わせたものと言われるが、実際には他にも様々な役目があった。江戸の行政、治安維持も奉行所の管轄かんかつである。

火事と喧嘩は江戸の華、という言葉があるように、江戸では火事が多かったが、防火、消火、更には地震、台風など天災が起きた際も奉行所が防災の指揮とを執る。

江戸の治安を守るための機関であるため、南町、北町奉行所、共に警護りきは厳重であった。中に入ることが許されるのは、町奉行と与力りき、そして同心どうしんたちだけである。

江戸時代中期以降、多少規制が緩み、定廻じょうまわり同心が私的に雇っている目明めあかしたちも出入りを許されるようになったが、町人はもちろん、武士であっても一切入れなかった。

例外は何らかの事件が起きた際の関係者たちだけである。奉行所

は警察と裁判所を兼ねているため、奉行所内で取り調べと裁判が行われる。

この時だけは被疑者、証人、訴えを起こした者が、いわゆるお白州しろすに集められ、そこで判決が言い渡された。

だが、これはあくまでも例外であり、基本的に門は閉まっている。誰すいか何されるのは当然であった。

鳥居の奴はうまいことを考えたもんだ、と改めて團十郎は思った。陰富は違法な博奕である。何よりも重要なのは、開帳する場所の確保であった。

江戸八百八町で最も安全な場所、それは奉行所だろう。これ以外となると江戸城内しかないが、人目が多いため、秘密を守るためには奉行所の方が適している。

奉行所に部外者が出入りすることはできない。しかも門はひとつだけで、常に門衛もんゑいが二人以上立ち、監視の目を光らせている。

何か異常なことが起きたり、無理やり奉行所に押し入ってくる者がいたとしても、対処は十分に可能だ。

しかも、陰富を取り締まるのは町奉行なのである。立場と権力をうまく使うことで、鳥居は絶対に安全な陰富開帳の場を得たと言っている。

誰何を受け、寛永寺僧侶法良ですと名乗ると、うなずいた門衛が

ゆっくり門を開いた。法良が来ることは、前もって知らされていたのだろう。

しばらく待っているように、と二人の小坊主に声をかけてから、團十郎は奉行所に足を踏み入れた。

一度入ったことがある、とつぶやきが漏れた。手鎖の刑と江戸十里四方所払いを言い渡されたのは、この南町奉行所のお白州だった。

(ありやあ、嫌なもんだったな)

今度はため息が口をついて出た。ただし、入ったのはそこまでである。

(さて、どうなるのか)

江戸時代においては、身分を証明するために寺請証文てらうけしょうもんが発行されていた。寺請状とも呼ばれるが、すべての民が寺の檀家だんかになっているため、宗門別人別帳が戸籍代わりであるこの時代、身分証明書は寺請証文が一般的であった。

旅行や転居の際には所持を義務づけられていたが、常に携帯していなければならぬわけではない。身元確認のため、寺請証文を見せろと言われたら、忘れたと開き直るつもりだったが、何も言われなかった。

法良は何度も鳥居の陰富に加わっているため、顔を覚えられているのだろうし、剃髪した頭と僧衣が何よりもはっきりと身分を明ら

かにしてくれた。

刺っしておいてよかった、と青光りする頭に手を当てた團十郎の前に現れた目付きの悪い小柄な男が、奥へどうぞ、と案内した。

まともな武士ではないとひと目でわかったし、奉行所の与力や同心でもないだろう。目明かしの類だと見当をつけたが、外れてはいないはずだった。

目明かし、岡っ引きとは、同心が私的に雇う非正規警察官と考えるとわかりやすい。

その多くが元犯罪者で、裏社会の情報に通じているため、犯罪捜査が容易になるという利点があったが、その立場を悪用し、商家から金を脅し取るなど、彼ら自身が犯罪に加担している場合も少なくなかった。

「すみませぬ、目を患っておりまして」左目を押さえながら團十郎は言った。「もう少し、ゆっくり歩いていただけませぬでしょうか」

おや、というように男が足を止めた。ものもらいでございます、と團十郎はうなずいた。

「ご心配には及びませんが、何もかもがぼんやりとしか見えませぬ。申し訳ございません」

深々と頭を下げたが、これも芝居のうちだった。

今から陰富の会合に加わるが、法良を見知った者がいるはずであ

る。眼病であると偽っておけば、多少受け答えがおかしくてもどうにかなるだろう、という考えが腹の内にあつた。

奉行所東側にある支度部屋したくの前で、こちらでございませう、と男が腰を屈めた。鶴松が言っていた通り、二つの棟が並んでいたが、男が開けたのは向かつて右側の襖ふすまだった。

手を合わせて念仏を唱えてから足を踏み入れると、そこに十人ほどの男たちが座っていた。

哄笑こうしょうが飛び交い、酒の匂いが漂っている。遊びには慣れていりつもりだったが、性に合わない鼻をつまんだ。

何とも言い難い、集まっている者たちの面に、どす黒い欲からが絡まっているような気がした。誰もが腹に一物、あるいはそれ以上の何かを抱えているのではないか。

これはこれは、と杯を持ったまま中年の武士が立ち上がった。顔が赤いのは、酔っているためなのだろう。近づいてくる足元が怪しかった。

「お坊様、遅かったな。皆で先に一杯やっていたところだ。まあ座れ、前回は悔しかっただろう。何しろ最後の数字が違っていただけで——」

肩に手をかけた武士に、ものもらいを患っておりますと團十郎は左目を閉じたまま顔を向けた。

「たいしたことではありません。もう治りかけておりますので、心配なさらぬように……ただ、お顔もはっきりと見えませぬ。失礼なこともあるかと思いますが、お許しください」

それはそれは、とつぶやいた武士が腕を取って、空いていた座布団に團十郎を座らせると、わしがわかるかね、と顔を近づけてきた。

「旗本の松平誠之進じゃよ。お坊様の右に座っておられるのは、長岡藩江戸家老の藤田殿」

これは失礼しましたと頭を下げたが、顔も知らない男たちである。話しかけられても、迂闊に返事もできない。

あまりお近づきにならない方がよろしいかと思えます、と目を押さえながら言った。

「この病はうつりますので……わたくしも檀家からうつされたのですが、難渋しました。朝昼晩、薬草を煎じた汁で目を洗うのですが、その滲みること滲みること」

まばたきを繰り返し、目をこすった指を座布団になすり付けると、藤田という武士が不快そうな表情になった。うつされると思ったのだろうか。

「ほんの一刻ほど前、目を洗ったばかりですが、まだ目の痛みが引きませぬ。医者に言わせれば、それが治っている証しということですが、お武家様方にご迷惑をおかけするのは、仏道に背くことにな

ります。どうか、お気をつけくださいませ」

松平が腕を放し、座っていた座布団ごと少し離れた。藤田という長岡藩の江戸家老は背を向けている。

そりやそうだろう、と團十郎はうなずいた。この時代、目医者はいたが、ものもらいを治せる者はいない。それだけ厄介な病なのである。伝染性があることはわかっていたから、近づきたくないと思うのは、誰でも同じだろう。

手探りする風を装って、手元に置かれていた猪口を取り上げた。香りで灘の酒だとわかり、ごくりと喉が鳴った。

それは酒にござる、と顔だけを向けた藤田が声をかけた。

「隣の湯呑みが玉露。前も間違えて酒を飲み、猪口一杯で酔い潰れていたが、湯島千両陰富の集まりは本日だけ。細かい取り決めなどもあるゆえ、お茶にしておいた方がよろしかろう」

聞こえないように舌打ちして、團十郎は手前の茶を飲んだ。

酒といえば何といっても灘である。法良の馬鹿野郎と心の中で罵ったが、考えてみれば僧侶なのだから、酒を飲まないのは当然だろう。

顔を上げると、それぞれの前に二つの膳が置かれ、魚介を中心に美味そうな酒の肴が並んでいた。ますます酒が飲みたくなったが、ここは堪えるしかない。

その後、遅着した数人の男が現れ、着座した。團十郎も含め、全部で十五人である。

それぞれの話に耳を澄すましていると、名前や身分がわかった。大名の家中、大身の旗本、富裕な商人も陰富の客として連なっていた。

十四人の男たちの間にも、身分差があつた。一番下は商人だが、武士同士の間でも言葉遣いが違う。丁寧に話す者もいれば、権高に話す者もいた。

ただ、團十郎に対しては、僧侶は法外の者で、畏敬いけいの対象という意識があるためか、どこか遠慮があるようだった。

しばらく飲み食いしていた男たちの会話が一段落するのを待っていたように、奥の襖が開き、入ってきた背の低い男が鋭い眼光を左右に向けた。全員が一斉に口を閉じた。

後ろ手に襖を閉めた鳥居耀蔵ようぞうが、わざわざのご参集申し訳ございませぬ、と低い声で言った。

鳥居の声を聞くのは、二年前捕縛されたあの日以来である。人の声じゃねえな、と頭を垂れたまま團十郎は腹の中で毒づいた。

死人が口を開いたら、こんな声になるのではないか。冷たいというのではなく、奈落の底のように暗い声である。

冷たいといえば、鳥居が入ってきた時、支度部屋に冷気が流れ込んだように感じた。錯覚ではない。その証拠に、二の腕に鳥肌が立

っていた。

(相変わらず気味の悪い野郎だ)

妖怪という異名を持つこの男らしい。顔の造作は蛇のようだが、それなりに端正である。むしろ、異常なまでに整っていると言うべきかもしれない。

真ん中で分ければ、人の顔は左右それぞれ造りが違うのが普通だが、目の大きさ、鼻の形、薄い唇、何もかもが測ったように同じである。蝮まむしの精巧な人形を造ればこうなるのではないか。

(眉毛の本数まで同じかもしれない)

人ではない何か、という印象が強いのは、そのためでもあった。

「本日、皆様にご参集いただきましたのは、まず幕府のご沙汰さたにより、天保十五年睦月一日より、全国の社寺における富籤興行とみくじこうぎょうがすべて禁じられることが正式に決まったとお伝えするためです」

丁寧な言葉遣いだったが、鳥居の話し方には感情がなかった。人によつては、慇懃無礼いんぎんぶれいと思うだろう。

声を聞いているだけで、座っているのが苦痛になった。理由があるのではなく、ただ無性に苛つくのである。

だが、今は鳥居の話聞かなければならない。他の者と同じように、うなずいて耳を傾けた。

富籤が廃止されれば、陰富も終わらざるを得ませぬ、と鳥居が言

った。

「従いまして、師走大晦日の湯島千両富をもつて、この集まりも最後となります」

舌打ちの音、残念と言う者、畳を叩く者。それぞれ反応は違ったが、共通しているのは悔しいという感情だった。

隣では藤田が筆算している。目の端に映った数字に、團十郎の口からしゃっくりが飛び出した。損金の和が七万二千両とある。

そこまでの大金を、鳥居の陰富に注ぎ込んでいる者たちばかりなのだから、悔しいと思うのも当然だろう。

さて、と鳥居が持っていた扇子せんすで軽く畳を打った。

「皆様の申される通り、残念ではありますが、いずれまた再開する日も来るでしょう。それまでの辛抱ということで、ご理解いただければと」

湯島千両富は最後を飾るにふさわしい大興行、と笑みを浮かべた。

真つ赤な唇が耳元まで裂けるような、薄気味悪い笑顔である。

「約十年、今日まで陰富札に皆様がどれほどの金子きんすを張っていたか、それぞれ違いはありますでしょうが、すべてを取り戻し、更には莫大な利を得ることもできるかと存じます。今から詳しくお話し致しますので、よくお聞きください」

懐から取り出した和紙の束を、お回しください、と左右の者に渡

した。

「今回の湯島千両富、そして千両陰富について、細部まで記してあります。後ほど回収致しますので、お含みおきください」

（用心深い野郎だ）

回ってきた三枚の和紙に視線を向けながら、團十郎は首を捻った。鳥居本人が書いたわけでもないだろうし、署名もない。

だが、何らかの証拠にはなるだろう。それを嫌って、回収すると言っているのがわかった。

「ひとつ、湯島千両富に関して」一枚目の紙に目をやった鳥居が低い声で読み上げた。「千両富が隔年で行われていることは、皆様もご存じでしょう。留札とめかたの褒美金が千両というのは、他の寺社でもほとんど例がありません。高額過ぎるゆえ、寺社奉行も禁じておりますが、大義名分があれば別」

薄い唇を閉じた鳥居が、左右に目を走らせた。蝮と呼ばれている通り、蛇のように冷たい目である。

「此度こたびで六度目になりますが、定法がごさいます。何しろ千両富ですから、万事とて滞りなく行われることが重要となります」

男たちがそれぞれ小さくうなずいた。書面に目をやりながら、厳重なこった、と團十郎はつぶやいた。

* * *

前にも触れたように、富籤は神事である。そのため、執り行われるのは寺社のみ、と決まっていた。管轄するのは寺社奉行である。

神事であるゆえ、細かい手順や作法がある。寺社の大小、宗派などによって違いはあるが、それぞれ厳しい取り決めがあるのと同じであった。

江戸時代初期から中期に至るまで、富籤興行の褒美金の相場は百両というのが一般的だった。

八代將軍吉宗が公営化した後、冥加金みよすがきん（税金）徴収の増額を図る幕府、興行を執り行う寺社側の利益、そして一獲千金を狙う庶民の願望が合致したことで、褒美金が高騰こうとちやうしていく。

この辺りの事情は、現在の宝くじとまったく同じと云っていい。その中で最も高額な褒美金となったのが、千両富であった。

多くの場合、富籤興行では富箱を百回突くのが定法である。中に入っている数千枚から一万枚の富札を百回突いていき、一番籤、十番籤、二十番籤というように、きりのいい数字が当たり籤となる。

そして百回目に突かれた富札を留札と呼び、最も褒美金が高額になる。宝くじで言えば一等である。

その次に褒美金が高いのは一番籤で、これが二等となる。その他、十番ごとに突かれた富札は三等ということになるだろう。

その他に留札の前後賞、あるいは組違い賞などもあり、それぞれ褒美金が支払われた。どちらも江戸初期から記録が残っているが、この辺りのシステムも現在の宝くじとまったく同じである。

江戸と上方、あるいは他の地方、かみがた寺社によって、多少やり方は異なり、また江戸後期になると回転式の富箱が作られ（現在、商店街の福引などで使われているものと同タイプである）、それによって当たり籤を決めることもあったが、いずれにしても基本的には同じである。

湯島千両富でも、当たり籤は富突によって決まるが、他の富籤興行と大きく異なる点があった。

一般の客が購入する富札は紙製で、そこに番号と朱印が押してある。富突に使用される富札は木製で、縦二寸五分（約七・五センチ）、横一寸三分（約三・九センチ）、厚さ二分（約六ミリ）の薄い板切れである。

以下、混乱を避けるため、客が購入する富札を紙富札、富突に使われる富札を板富札と呼ぶ。

富籤興行を主催する寺社は富箱を用意し、その中に板富札を入れるのだが、富箱の大きさにも規定があった。

現存する資料「富興行一件記」によると、享保から寛政期にかけては、〃堅内法二尺七寸一分余（縦・約一〇二センチ）、横内法一尺六寸二分（横・約六二センチ）、但し深さ一尺六寸四分（深さ・約六三センチ）、木枠の厚さ四分（約一・五センチ）〃とされていた。

これもまた地方、寺社、宗派によって多少の差はあったが、平均的な大きさはこの程度、という意味である。

通常の富籤興行においては、この富箱の中に板富札を入れてかき回し、^{きり}錐で突くのだが、湯島千両富では販売される紙富札が六万枚と大量なため、容積の限界があった。単純に、六万枚の板富札を入れることができないのである。

そのため、湯島千両富における富突は通常とまったく手順が違った。

まず、準備されるのは五つの富箱である。一つ目の箱には福祿寿松竹梅、六枚の板富札が百枚ずつ入っている。これを十回突いていくのである。

突かれた板富札は境内の奉納額に順に掲げられる。例えば一番最初に突いた板富札が福であれば、これが万の位の頭の文字となる。

最後に突いた十番目の板富札が寿であれば、これが留札の頭の文字になった。

次に、いろはにほへとちりぬ、という文字が記された板富札が百

枚ずつ入っている富箱と交換し、再び十回突く。突いた順に万の位の文字の下に並べていく。これが千の位となる。

そして、百の位は一から十までの数字が記された百枚の板富札が入っている富箱を十回突き、万の位、千の位の次に置く。

十の位は再びいろはにはへとちりぬ、一の位は一から十までの数字で、手順はまったく同じであった。

湯島千両富では、このようにして当たり籤を決めることになっていた。最後の最後まで留札がわからないため、富札を購入する客にとって博奕の醍醐味だいごみを味わうことができる。そのため、大変な人気を博した。

湯島天満宮に数万人の群衆が集まり、過去には興奮した人々が前へ出ようとしたため将棋倒しとなり、怪我人が出たこともあったほどである。

それにもかかわらず、この形が定着したのは千両という高額な褒美金のためであった。神事である富籤に不正は許されないが、千両という大金が動くとなれば、イカサマを試みる者も出てくる可能性がある。

突き手が恣意的しゐいに文字や数字を選んで突くことも、絶対に不可能とは言い切れない。また、富箱を回転させる際、手心を加えて富札の偏りを作ることも有り得る。

千両という大金には、それだけの魔力があった。何があってもおかしくない。

万の位から一の位まで、毎回富箱を交換するのは、突き手を替えることで不正を防止する、という狙いが勸進元かんじんである湯島天満宮、そして管轄している寺社奉行にあつたためである。

通常なら、数千枚から一万枚の板富札を入れる富箱に、六百枚から千枚の板富札しか入れないため、十分にかき回すことができた。これもまた、イカサマ防止策のひとつであつた。

不正やイカサマ防止が重要なのは当然だが、数万人の群衆がすべてを見ているため、僅わずかにでも疑われるようなことがあつてはならない。

何しろ千両である。不正の気配を感じただけで、大騒ぎになるだろう。暴動が起きても不思議ではない。そのために編み出されたのがこの手法だつた。

富箱を交換するたび、箱の中を集まっている群衆に見せ、神事であるため毎回祈禱きとうをしなければならぬ。繁雑はんざつではあるがやむを得ない、というのが寺社及び寺社奉行の判断だつた。

* * *

湯島千両富に関しては以上です、と鳥居が言った。

質問する者はいなかった。湯島千両富の富突は有名であり、誰もがその独特なやり方を知っていた。

では、湯島千両陰富について、と鳥居が二枚目の紙をめくった。

「皆様が買われる富札は一枚百両。これは今までと変わりありません」

團十郎は口を手で押さえた。空いた口が塞がらないとは、まさにこのことだろう。

湯島千両富の富札は、一枚八朱しゆである。八朱は二分だから、一両の半分の価値にあたる。現代の金額に換算すると、四万円弱ほどだろうか。

多くの富籤興行で、富札の値段は一朱ないし二朱であった。約四千五百円ないし約九千円で、現代の宝くじの価格と比べると信じられないほど高いが、発行枚数が大きく違うので、一概に比較はできない。

例えば二〇一八年の年末ジャンボ宝くじは、一枚五百円だが、発売されるのは六億六千万枚である。

それに対し、江戸時代の富籤興行では、約一万枚ほどの富札が販売されるだけだった。富札一枚の値段が上がるのは、寺社側の収益を考えるとやむを得ないところであろう。

江戸時代の物価を考えると、一朱（四千五百円）は庶民が簡単に購入できる額ではない。そのため、十人前後で一枚を買うということも少なくなかった。

陰富では正規の富籤興行における褒美金の倍率が適用される。湯島千両富の場合、留札が当たれば八朱が千両になる。倍率は二千倍である。

鳥居の陰富では、陰富札一枚が百両だという。その二千倍は二十万両になるが、六万枚のうち一枚だけの留札を当てることなど、できるはずがない。それを考えると、異常な高額だった。

一枚百両です、と鳥居が繰り返した。

「何口でも結構ですし、お一人様何枚購入されても構いません。今回が最後です。ちまちま賭けても始まらないでしょう」

そうだな、と男たちがうなずき合った。身分の高い武士、裕福な商人たちの集まりだから、金に余裕があるのだろうが、團十郎には狂気の沙汰としか思えなかった。

「一番札に始まり、十番ごとの当たり札、その前後札、あるいは組違い、すべて湯島千両富に準じ、支払う褒美金も倍率を合わせます」

鳥居の説明が続いている。聞いているだけで虫唾むしずが走る、と團十郎は首筋を搔かいた。

「また、今まで通り皆様が支払った金額の二割五分はそのまま返金

します。よろしいですね」

結構結構、と松平が肥えた腹を叩いた。それでは相違点について、と鳥居が最後の紙をめくった。

「まず、これまで皆様が陰富札を購入した金額の総和ですが、約四百万両となっております。ですが、その二割五分、つまり四分の一は既にお戻し済み。また、一割は胴元であるわたくしが寺銭として受け取っています」

胴元として鳥居が得た金額は約十年で四十万両、と團十郎は頭に数字を刻み込んだ。それだけの金を賄賂わいろとして使えば、出世は思いのままだっただろう。

差し引き二百六十万両となりますが、と鳥居がまた笑みを浮かべた。

「これまで留札の当たりにこそ出ていないものの、他の当たり籤は出ておりますし、前後籤、組違いなども含め、百五十万両を支払っています。その他すべてを勘定しますと、預かり金は百万飛んで二千両」

それで、と全員が身を乗り出した。今回が最後です、と鳥居が手にしていた三枚の紙を畳に置いた。

「もし留札を当てた方が出た場合、通常の二十万両に加え、預かり金の百万二千両全額をそっくりそのままお支払いします。無論、他

の当たり籤についても、それぞれ褒美金をお渡しします」

一瞬、全員が沈黙し、すぐ破れるような笑い声が上がってきた。

馬鹿しかいねえのか、と團十郎は苦笑を浮かべた。留札の当たり籤なんか、出るわけねえだろうが。

だが、それは自分が富籤や陰富に興味がないためなのだろう。

ここにいる男たちは、博奕に淫いんしている。そして、その興奮は褒美金の額が大きくなればなるほど膨れ上がっていく。百二十万両という金は、人の心から正気を奪うには十分な額だった。

更に、と鳥居が拳で軽く畳を叩いた。

「どなたも留札を当てることができなかつた場合、以前お約束した通り、百万二千両を今まで皆様が陰富札を購入した金額に応じ、払い戻します。そのために、わたくしは出納帳すいとうをつけておりました。

一両単位まで、きっちりお返しします」

全員が笑いながら箸で器を叩いた。なるほどな、と團十郎はつぶやいた。

今まで男たちが賭けていた金子の総和が四百万両というから、一人当たり二十五万両ほどを使っていたことになる。十年だから年間二万五千両だ。

それも大金だが、最終的には取り置き金から払い戻すという約束があつたから、男たちは陰富にのめり込んでいったのだろう。

全額ではないにしても、返金の保証がなければ、こんな話に乗る馬鹿はいなかったはずだ。

「明日から師走。湯島千両富が開かれる当日の日の出まで、陰富札を買うことができます。その番号は皆様がお決めになり、わたくしの方にお知らせください。湯島千両富は正午から始まります。その刻までに陰富札のお支払いをしていただくことが条件となりますが、これは以前と変わリませぬ。よろしいですね」

おう 応、と全員の声が響いた。大晦日、ここへお集まりください、と鳥居が言った。

「皆様が何口、何枚の陰富札をお求めになるか、それはわかりませぬが、少なくとも十枚以上になるはずと考えております。先ほどもお伝えしたように、湯島千両富は万の位から一の位まで、五回富札が突かれます。常より時はかかりますが、それもまたお楽しみのひとつ」

当日は芸者衆も呼びますし、酒も肴も最高の物を揃えます、と鳥居が唇を歪めて笑った。

「わたくしの方で目明かしを手配し、湯島天満宮で待たせることにしております。その者たちが数字や番号を書き写し、八丁堀へ戻り、報告をする手筈。最後の最後まで、留札の番号はわかりませぬが、面白い趣向とは思いませんか」

面白いな、と松平が大笑した。

「まさに一喜一憂。どうなるかわからぬというのは、皆同じ。胸が躍るとはこのことだ。だが——」

だが、と鳥居が顔を向けた。目明かしたちは信用できるのか、と松平が囁いた。

「彼らが不正を働くと申しているのではない。湯島千両富の突き札は、翌日に売られる瓦版でわかるからな。そうではなくて、見間違えたり、書き損ねることがあるのではないか、と申している」

なるほど、と周囲にいた者たちがそれぞれうなずいた。そうであろう、と松平が畳を強く叩いた。

「もし、万が一にも目明かしたちが間違った数字や文字を我らに伝えたらどうなる？　そして、その番号の陰富札を我らの誰かが持つていたら？　本当の当たり籤と番号が違っていたら、外れになるのだろうか？」

「左様です」

それではぬか喜びではないか、と松平が天井を仰いだ。

「落胆も甚はなはだしい。何しろ百二十万両だ。間違いは許されぬ」

松平様のおっしゃる通り、と他の数人が首を縦に振った。心配はご無用、と鳥居が切って捨てるように言った。

「索性さえよくわからぬ目明かしが多いのは、松平様の申される通

りですし、文字も読めず、数字を数えることができぬ者がいるのも確かです。しかし、そこはわたくしも考えております」

考えとは、と松平が尋ねた。此度の陰富では、わたくしも賭け手に回ります、と鳥居が薄い唇を舌で湿した。

「間違いがあつてはならないというのは、わたくしにとつても同じです。それゆえ、信用できる者を選び抜きました」

入れ、と手を叩いた。襖が開き、繋がっているもう一つの支度部屋で五人の男が平伏していた。

顔を上げよ、と鳥居が命じた。

「手前からひる蛭の仁吉、かすみ霞の幸助、とび鳶の五郎太、かっせう猫屋の勝蔵、その弟の時蔵ときぞう。この者たちが伝令となり、湯島から八丁堀へ番号を知ら

せることになっております。いずれも読み書き算盤そろばん、ひと通りのことはこなせる者ばかり。絶対に間違いはあり得ませぬ」

よくもここまで人相の悪い連中を集めたもんだ、と團十郎は感心していた。

特に蛭の仁吉という禿頭はげあたまの大男など、異相としか言いようがない。最後の猫屋の兄弟はそれぞれ子猫を抱えていたが、あまりに不釣り合いで笑えてくるほどだった。

妖怪の手下は妖怪ってことかと思つたが、口には出せない。黙つて五人の男たちの顔を見ているしかなかった。

この者たちはわたくしの忠実な僕えいしにございます、と鳥居が静かに口を開いた。

「命令に従い、余計なことは致しませぬ。間違いなく正しい番号を伝えますし、万が一にも過ちがあつた時は、即刻これ、」

首に手を当てた鳥居が顎あごを向けると、猫屋の勝蔵が膝の上に抱えていた子猫を差し出した。

可愛い子よ、と受け取った鳥居が頬ずりをした。

「この者たちはわたくしにとって子猫も同様、家族も同然。ですが、皆様方にご迷惑をおかけするようなことがあれば、死んで償つぐなうしかありません」

このように、と鳥居が素早く子猫の首を捻ひねった。鈍い音がして、そのまま子猫が動かなくなった。首の骨が折れたのだろう。

捨てておけ、と鳥居が子猫の死骸を放った。

「お約束致します。間違いは起こしませぬし、もし起きた時にはこの五人が死んでお詫び致します。無論、取り置き金はその場で皆様にお戻しする所存。おわかりいただけましたでしょうか」

支度部屋が静まり返った。團十郎は胴震いを堪えた。

目の前にいる鳥居耀蔵という男の本質がわかった。人でも妖怪でもない。悪鬼あつきである。そうでなければ、躊躇ちゆうちよなく子猫の首の骨を折ることなど、できるはずがない。

お見苦しいことを致しましたと頭を下げた鳥居が、下がれと男たちに命じた。

「ささ、新しい酒と肴を運ばせましょう。おくつろぎいただき、百二十万両の使い道を語り合うのも、また一興ではありませぬか」

五人の男たちが去り、代わりに膳部を掲げた若衆たちが入ってきた。
わかしゅ

女手がなくて申し訳ありませぬ、と鳥居が暗い笑みを浮かべた。

男色好みという噂が鳥居にはあるが、実際にそうなのだろう。

一瞬、團十郎と目が合った。だが、それだけだった。酒をという

鳥居の声に、若衆たちが笑みを浮かべながら酌を始めていた。

(つづく)